

島根県敬川沖における魚類の出現特性—III — 底生魚類群集の経年変動 —

森脇晋平¹・若林英人²・為石起司³

Occurrence of fish off Uyagawa, Shimane Prefecture—III — Interannual variability in occurrence of demersal fish community —

Shimpei MORIWAKI, Hideto WAKABAYASHI and Tatsuji TAMEISHI

Abstract: We examined occurrence of demersal fish, and considered the relationship between alternation of the fish fauna and the oceanographic condition in the south-western Japan Sea off Uyagawa for the period between 1982 and 2003 except 1984-85,1994. Using the cluster analysis of similarity index of fish fauna, three major groups of years were distinguished: group I, from the early 1980s through mid-'80s; group II, from the late 1980s through late 1990s; group III, from the end 1990s to early 2000s. Ratio of cold-water fish were relatively higher in the period from group I, however, declined in the period of group II and cold-water fish were rarely observed in the period of group III. This indicates that the interannual fluctuations of species diversity coincide with changes in long term oceanographic conditions, implying that the oceanic changes affect the composition of fish communities.

キーワード：底生魚類群集，経年変動，島根県敬川沖，日本海南西部

はじめに

島根県敬川沖における底生魚類群集については、出現魚種の整理¹⁾及び魚類相の季節的変動と海況特性との対応関係²⁾についてすでに報告した。今回の報告では魚類群集の経年変化と既報の海洋環境とを対比した結果について述べる。

資料と方法

資料は既報^{1,2)}において用いたものと同じものである。

出現魚種の経年的な変動パターンを検討し、お互

いに同じ傾向をもって相関・連動する魚种群の組み合わせを抽出してデータの類型化を行うことを目的として、得られた資料を用いてクラスター分析を行った。ここでは数量そのもののデータではなく存否のパターンのデータとして処理した。具体的には、年ごとに魚種ごとの出現を「無し・有り」の0(無し) — 1(有り) データに変換してクラスター分析を行い、デンドログラムを得た。

また本報告では、出現した魚類の分布について加藤³⁾に記載されているものに従って3つのタイプ(寒冷系, 中間系, 温暖系)に分類した。これに記載のない魚種は、加藤³⁾に記載のある魚種のタイプと中坊ほか⁴⁾の分布域とを対比し整合性を保つように考慮して、タイプ分けを行った。

¹ 総合調整部 General Coordination Division

² 現：島根県浜田水産事務所 Hamada regional office of Fisheries Affairs, 254 Kataniwa, Hamada 697-0041, Japan

³ 現：島根県隠岐支庁水産局 Oki regional office of Fisheries Affairs, Saigo, Okinoshima 685-8601, Japan

結果と考察

本調査対象海域（図1）では調査期間を通じて259種の魚類の出現が認められている¹⁾が、出現状況の経年変化を付表に示した。確認した魚種数は1982年の最大150種から2000年の最低77種まで変動しており、長期的には減少傾向を示している。これはこの海域に出現する魚種数が必ずしも減少していることを意味するものではない。というのは、図2に示したように年ごとの曳き網回数と魚種数とを対比してみると両者には高い相関がみられる ($r=0.925$, $p<0.1\%$) からである。このことは曳き網回数すなわち掃海面積の増減によって魚種数が増減していると考えることによって理解できよう。太平洋南区の底曳き網漁業での漁獲物の種類数と航海数との関係を調べた結果によると⁵⁾、航海数の増加に伴って魚種数も増えることが認められている。工藤ほか⁵⁾は航海数を掃海する漁场面積と考えており、掃海面積と漁獲される魚種数との正相関の対応関係は一般的な現象であると考えられる。つまり出現種数の変化は曳き網回数の増減によってもたらされたものと考ええる。

出現魚種を分布によって3つのタイプに分類したが（付表）、その組成の変化を図3に示した。温暖系の魚種の占める割合は70.5~82.0%、中間系のそれは16.2~25.7%、寒冷系のそれは0~5.5%、をそれぞれ変動した。それらの割合に顕著な経年的な変化

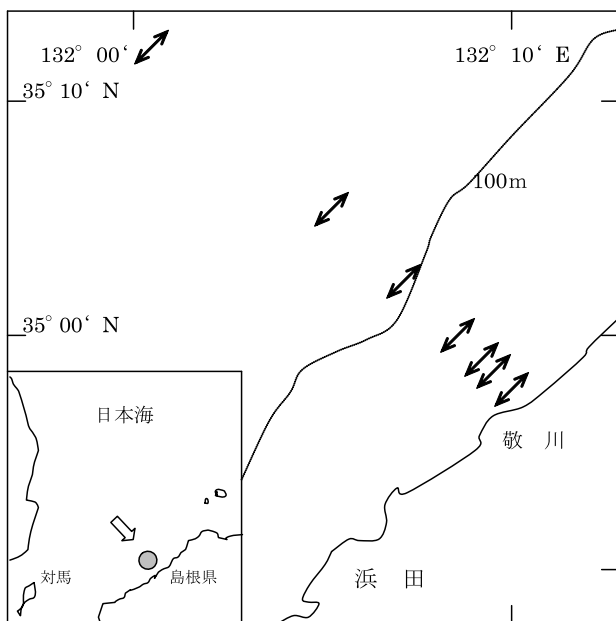


図1. 調査対象海域

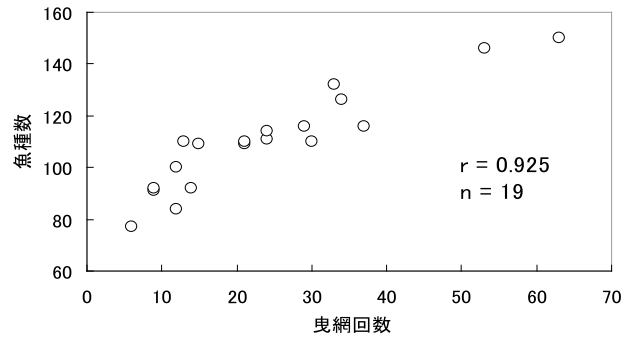


図2. 曳網回数と出現した魚種数との関係

は指摘できない。ただ、1980年代から1990年代初頭に寒冷系魚種の出現がみられたが、それ以降はみられないか、みられてもごくわずかの出現となった。

クラスター分析により各年々の類似性を検討した。組み合わせが結合している年が左にあればあるほど年の間の距離が短くて類似度が高いことを示しているが、分析の結果は大きく3つのグループに分類できた（図4）。1つは1980年代初めから半ばまでのグループI（1982, 1983, 1986）、2つ目は1980年代後半から1990年代後半までのグループIIで、これはさらに前半のサブグループII-a（1987~1990）と後半のサブグループII-b（1991~1993, 1995, 1997~1998）に分割される。さらに3つ目は1990年代末から2000年代初めまでのグループIII（1996, 1999~2003）である。

出現した魚種数の組成の経年変動（図3）をクラスター分析して類型化した結果（図4）とを対比してみると、I~II-aグループの各グループでは寒冷系魚種の占める比重が相対的に高かったが、その後は出現比率がしだいに減少して、II-b及びIIIの各グループではほとんどみられなくなったことがわかる。

ところで、日本海南西部海域の海況について特に水温の長期的な変動に関連した報告^{6~11)}を総合的

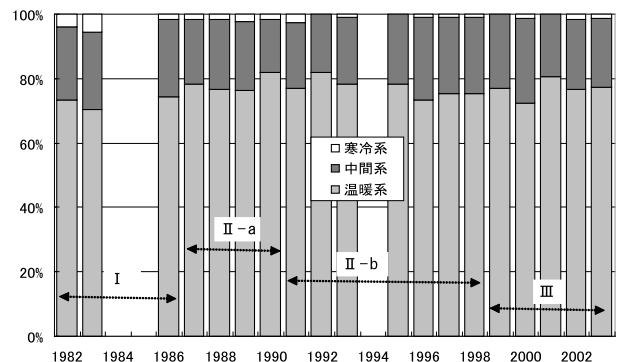


図3. 出現した魚種組成の経年変動

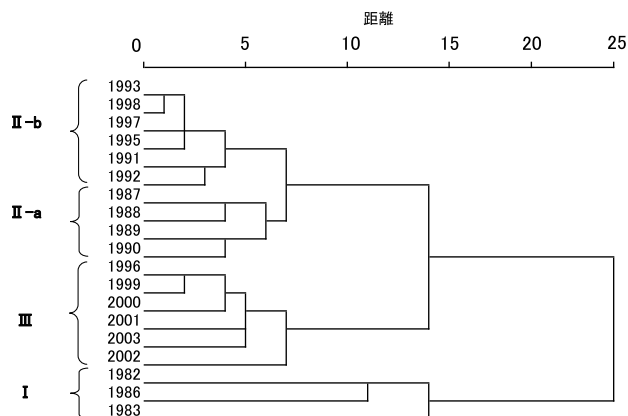


図4. クラスタ分析の結果

に要約すると、日本海南西部沿岸域では1980年代半ばまでは低温期であったが1980年代後半から上昇に転じ、その後1990年代末からは高温期にはいった、といえよう。このような水温の変遷と出現魚種を類型化した年々の対応関係は現象的にはよく符合する。すなわち、IとII-aのグループは低温期、II-bのグループは移行期、IIIのグループは高温期にそれぞれ呼応する。そして種組成の視点からは低温期から移行期にかけて寒冷系種の組成が減少して高温期にはほとんどみられなくなったことが指摘できる。

クラスタ分析の特性から考えて、各グループはお互いに同じ傾向をもって相関・連動する魚種群の組み合わせであろう。したがって、経年的な各グループの出現状況と水温の長期的な変動傾向の比較的良好な対応関係は低温期と高温期の水温環境の差異が魚種組成に影響を与えていることを示唆している。島根沖では陸棚底層部の海況変動が重要底魚類の分布パターンに影響を与えていることが報告されており¹²⁾、北部日本海におけるマダラ漁獲量や日本海南西海域におけるヤリイカ漁獲量と冬季水温とは連動していた^{13, 14)}。このように水温変動に伴う底魚類の分布変動が種組成の変遷に影響を与えている可能性は高い。ただ、環境と生物との関係を短絡的に結びつけるのは注意を要する。ここでは水温の長期的な変動と底魚類の組成の変遷との間には何らかの共変動、連動関係が存在することが示唆されることを指摘しておくに留めたい。

この海域(図1)は生物地理学的視点からみて魚類分布の南方系と北方系の境界にあたる^{15, 16)}ばかりでなく、まき網、底びき網、定置網などの主要漁業の好漁場である。それゆえ、今後ともこの海域における魚類群集の調査研究の充実が望まれる。

謝 辞

この調査を実施するにあたり、島根県水産試験場(現・島根県水産技術センター)調査船「明風」の歴代の乗組員一同、並びに関係職員にはデータの収集・整理に御協力いただき心より感謝します。

文 献

- 1) 松本洋典(2005) 島根県敬川沖における魚類の出現特性 - I. 島根水試研究報告, 12, 79-86.
- 2) 森脇晋平・松本洋典・為石起司・若林英人・田中伸和(2006) 島根県敬川沖における魚類の出現特性 - II. 島根水試研究報告, 13, 21-44.
- 3) 加藤源治(1956) 日本海海産魚類目録, 日本海の底魚漁業とその資源(以東底魚資源調査経過報告). 日水研研究報告, 4, 311-331.
- 4) 中坊徹次・編著(2000) 日本産魚類検索 全種の同定(第二版). 東海大学出版会, 東京.
- 5) 工藤晋二・通山正弘・水関 隆(1966) 太平洋南区における底魚類の生態学的研究 I. 魚種組成よりみた群集構造について. 南海区水産研究所報告, 24, 49-57.
- 6) 黒田一紀・平井光行(2003) 1990年代の日本海における海況の特徴, 特に低塩分現象について. 長江大洪水と東シナ海等の海洋環境(西海区水産研究所), 93-102.
- 7) 千手智晴・渡辺俊輝・繁永裕司(2003) 日本海山陰沿岸水温にみられる十年スケール変動. 月刊海洋, 35(1), 59-64.
- 8) 京都府海洋センター(2004) 京都府の海の水温変動. 季報 第80号.
- 9) 為石日出生・藤井誠二・前林 篤(2005) 日本海水温のレジームシフトと漁況(サワラ・ブリ)との関係. 沿岸海洋研究, 42(2), 125-131.
- 10) 加藤 修・山田東也・渡邊達郎(2006) 過去40年間における日本海の水温変動の特徴. 日本海区水研主要研究成果集, 1, 8-10.
- 11) 小林知吉・堀成夫・土井啓行・河野光久(2006) 山口県の日本海沿岸域における海洋生物に関する特記的現象. 山口県水産研究センター研究報告, 4, 19-56.

- 12) 森脇晋平・小川嘉彦（1989）日本海南西海域における”底部冷水”の底魚類への影響. 東北水研研報, 51, 167-181.
- 13) 石向修一（2001）北部日本海における定地水温の長期変動とマダラ分布域の北偏化. 水産海洋学会研究発表大会（2000年度）講演要旨集, p.50.
- 14) 田永軍（2005）日本海南西海域におけるヤリイカ資源の長期的変動に及ぼす海洋環境の影響. 水産海洋学会研究発表大会（2005年度）講演要旨集, p. 39.
- 15) 西村三郎（1981）地球の海と生命 海洋生物地理学序説. 海鳴社, 東京.
- 16) 中坊徹次（2005）日本の動物はいつどこからきたのか-動物地理学の挑戦-. p.71-77, 京都大学総合博物館編, 岩波書店, 東京.

付表 敬川沖板曳網調査で漁獲された魚種

綱	目	科	魚	種	名	タイプ*	1982	1983	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003																							
無類 軟骨魚	メクラウナギ ネコザメ メジロザメ	メクラウナギ ネコザメ トラザメ	メクラウナギ ネコザメ トラザメ ドチザメ カスザメ エイ	メクラウナギ ネコザメ トラザメ ドチザメ カスザメ エイ	種名	S																																										
						T																																										
						ウナギ	カタクチイワシ ウツボ アナゴ ハモ ウミヘビ	カタクチイワシ ウツボ アナゴ ハモ ウミヘビ	カタクチイワシ ウツボ アナゴ ハモ ウミヘビ	カタクチイワシ ウツボ アナゴ ハモ ウミヘビ	種名	T																																				
												S																																				
												ニギス	ニギス	ニギス	ニギス	ニギス	種名	S																														
																		T																														
																		トゲウオ	ヤガラ サギフエ ヨウジウオ	ヤガラ サギフエ ヨウジウオ	ヤガラ サギフエ ヨウジウオ	ヤガラ サギフエ ヨウジウオ	種名	S																								
																								T																								

* N:寒冷系 S:温暖系 T:中間系

